

全放射エネルギーの概略試算

東電・福島第一 100分の1程度が放出

東京電力は十二日、事故を起した福島第一原子力発電所1～6号機の、事故時と一か月後の全放射エネルギーの概略評価結果を発表した。

発表では、1～6号機の各炉心、使用済み燃料プールごとに、希ガス、ヨウ素などのハロゲン、その他の核分裂生成物(ストロンチウム、セシウムなど)別は、1～6号機の各炉心、原子力安全委員会が試算している放出された放射エネルギーは、当初あった放射エネルギーの約百分の一程度に相当する。

東京電力は、1～6号機の合計放射エネルギーは、事故発生の日時点では計七億二千万テラベクレル、一か月後の四月十一日時点では一億五千万テラベクレルに減少している。特に損傷の激しい1～3号機の炉心放射エネルギーは、各号機とも事故時のほぼ十分の一にまで減衰している。

原子力安全・保安院や原子力安全委員会が試算している放出された放射エネルギーは、当初あった放射エネルギーの約百分の一程度に相当する。

人・機材を全国から

電力各社 東電・東北電を支援

電気事業連合会は十五日付けで、電力八社と日本原電、電源開発、日本原燃の計十一社の東北電力と東京電力・福島第一原子力発電所への支援状況を取りまとめ発表した。

東北電力向けには電力流通設備を中心に、要員七百五十五名(社員四百一十名、協力会社三百五十四名)、発電機車四百二台、その他車両三百四十三台となっている。

東京電力向けには、原子力本部を松山市に移転へ

四国電力は十三日、東

子力関連の要員三百七十三名(社員二百七十四名、協力会社九十九名)、機車五十六台、その他車両三十九台となっている。

その他に各電力会社は、北海道電力が最大六十万kWの電力融通、十サイクル圏からは最大百万kWの電力融通、LNGや原油の供給なども行っている。

建屋内部写真を公開

東京電力 高い放射線量を測定

東京電力は福島第一原子力発電所の事故状況を調べるために、無人遠隔操作ロボットを初めて

使って、放射線量の高い1～3号機の原子炉建屋内の状況を調査した。

1,3号機は十七日、2



3号機原子炉建屋の二重扉の内側を開ける遠隔操作ロボット(十七日、東京電力提供)。



1号機の原子炉建屋一階部分を進む遠隔操作ロボット(十七日、東京電力提供)。

原子力本部を松山市に移転へ

四国電力

四国電力は十三日、東

号機は十八日に実施した。

ロボットが一階の原子炉建屋の二重扉を開けると、爆発で壊れたとみられる瓦礫などが散乱している状況が映し出された。

放射線量は、1号機の二重扉内側で毎時四十九ミリシーベルト(mSv)の時、その奥で十mSvの時、3号機では二重扉内側で二十八mSvの時、その奥で五十七mSvの時、四時間半に到達してしまう高いレベルだ。

2号機では、二重扉内は湿度が九四・九九%と高く、入り口付近で計測器の四・一mSv/時を撮影してからは、カメラのレンズが曇り、撮影が続行できなかった。

これらの数値について、原子力安全・保安院の西山英彦審議官は(今後の作業の)見通しをすくに変えなければならぬといっていることはいくつかの考えを示した。

福島事故で副読本見直し指示

高木文科相

高木義明・文部科学相は十五日の閣議後記者会見で、小中学生用エネルギー学習副読本に福島第一原子力発電所事故をふまえた場合に不適切な箇所があるとして、内容を見直すことを発表した。

小学生向けの「わくわく原子力ランド」では、「原子力発電所では、放射性物質が外にもれないよう、五重のかべでしっかりとしこめていきます」という記述、中学生向けの「チャレンジ!原子力ワールド」では、「大きな地震や津波にも耐えられるよう設計されている」という記述などが見られる。

Leading Supplier of Nuclear Fuel Cycle Goods and Services



株式会社テネックス・ジャパン
TENEX-JAPAN Co.,

東京都港区虎の門5丁目11番2号 オランダヒルズ森タワー14F
(Tel):03-5776-1511 (Fax):03-5776-1512 (E-mail): info@tenex.co.jp